

第6回 消えた六条三筋町

六条三筋町の名残は今なし

今回は、前回(第5回)のつづき、その南をめぐってみましょう。室町通を南へ、五条通の信号を渡って、楊梅通にでます。この通りは、平安京の楊梅小路(やまももち)通りの名前を読み込んだらわらべ歌では、「まつまんごじよう、せったちやらちやらつおのたな、ろくじよう……」とあるように、雪駄屋町として読み込まれています。



室町通 楊梅上ル 大黒町 ①



楊梅通 室町東入 大黒町 ②

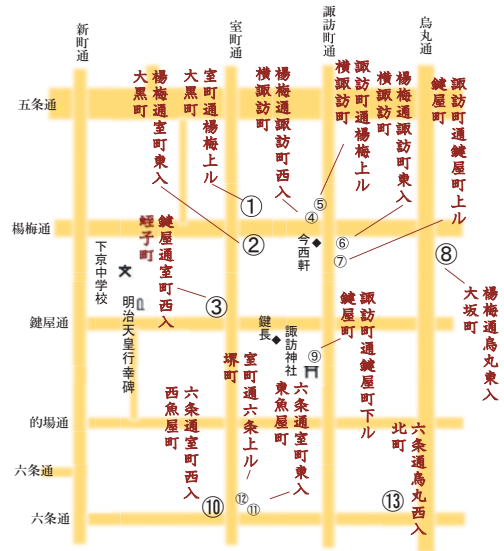
たどり着いた楊梅室町の十字路には、仁丹の町名看板が二枚。

ここで、京都の東西の通りを詠み込んだらわらべ歌を紹介しましょう。

まるたけえびすに、にしおいけ、
あねさんろつかく、たこにしき、
しあやぶつたか、まつまんごじよう、
せったちやらちやら、うおのたな、
ろくじようさんてつとおりすぎ、
ひつちようこえれば、はちくじよう、
じゅうじようとうじでとどめさす

「七条」(し↓ひ)を越えたところで歩き疲れて、息が切れたのでしようね。残りは、単に七・八・九・十となっています。

ちなみに、わらべ歌にあらわれた通りを、このあたりの東西の通りに当てはめれば、「まつ」は松原通、「まん」は万寿寺通、「ごじよう」はそのまま五条通、「ちやらちやら」は鍵屋町通との場通(古くは銭屋町通)(多分鍵や銭の触れ合う音)、「うおのたなろくじよう」は六条通となります。六条通の両側町に、西魚屋町や東魚屋町がありますが、六条通を別名魚棚通と呼んでいた名残です。もうすこし東には、旧六条通と広くなった六条通がありますので、この状態を歌いこんだものとすれば、「うおのたな」と「ろくじよう」を別ものともみなせませんが、これは考えすぎです。



仁丹町名看板の所在（室町通の五条から六条まで）

まず、東北のかどに「室町通楊梅上ル大黒町」①の町名看板があります。また、東南のかどには、町名看板「楊梅通室町東入大黒町」②が貼ってあります。

楊梅室町の十字路から西南の区画（もとの尚徳中学校の跡地、今は下京中学校の敷地を含む地域）、通りの名前をあげれば、東西は室町通と西洞院通のあいだ、楊梅通、鍵屋町通、的場通のあたりに、一六〇二年（慶長七年）から約四十年間、六条三筋町（正式の名称は、六条柳町）という遊郭が置かれていました。一五八九年（天正十七年）にひらかれた二条柳町から一六〇二年（慶長七年）に移転してきて、強制移転によって、一六四一年（寛永

十八年）に島原（朱雀野）に移るまでの間です。

『都名所図会』の「島原傾城町」の項に、六条三筋町のことのできます。それによると、

室町新町西洞院五条橋通の南にて、方二町の郭なり。中に小路三通ありしにより三筋町と号す。六条通（今の魚佃なり）西洞院川にかくる石橋は、傾城町の入口にし（後略）

とあります。実は、ここに架っていた石橋は、岡崎の京都市立動物園内に移設されて現存しています（六条三筋町があった当時の橋ではなく、明治六年に架設されたものですが）。現存する橋の親柱には、「魚店橋」と「西洞院」の文字が刻まれています。

この地域には、たとえば「六条三筋町跡」などの碑が立っていてもよさそうにおもいますが、現在は、きれいさっぱり、なんのよすがもありません。ただ、上柳町、蛙子町、大黒町など、いかにもいわくありげな町名があるのは、その名残でしょう。さらには、「鍵屋町通と的場通が、新町通で行き止まりになっていること」も、「六条通が新町通で折れ曲がっている（西に向かつて歩くと、同様に新町通で行き止まりになっている）こと」も関係ありそうです。しかし、『都名所図会』にあるように六条三筋町の西のはずれが西洞院通なら、鍵屋町通と的場通が、新町通で行き止まりになっていることがどうも合点がゆきません。例によって、ちょっと詮索してみましょう。

『京都市の地名』の「六条三筋町」の項の記載によると、一六〇二年に六条三筋町ができた当初は、東西は室町通と新町通の間

で、遊郭の通称となった三筋の通り（北から、柳町上ノ町（今の楊梅通の両側町、現在の上柳町、大黒町に相当）、柳町中ノ町（いまの鍵屋町通の両側町、現在の蛭子町に相当）、柳町下ノ町（今の場的場通の両側町、現在の銭屋町、堺町に相当））を中心としていました。新設したと考えられる柳町中ノ町の通り（いまの鍵屋町通）と柳町下ノ町の通り（今の場的場通）が、新町通で突き当たりになっっているのは、これで合点がゆきます。『俗事百一起源』（宮川政運、一八六五。復刻版、『塵塚談・俗事百一起源』現代思潮社、一九八一）には、「遊女を太夫と云う始め、ならびに島原のこと」という項があり、そこに六条三筋町のことが出ています。そこには、「慶長七年に娼房を室町六条通りに移さる。東は室町を限り、西は新町、北は五条橋通りに至る、世にこれを三筋町と云いしなり（今の雪駄町より魚の棚店までの間二三町その跡なり）」と書かれています。

地図をみると、新町通から以東は、楊梅通、鍵屋町通、的場通、六条通がほぼ等間隔になっていることも、六条通が挿げ替えられた結果であると説明できますね。さらには、下京中学校を建設するときの発掘調査で楊梅小路（平安京の東西の小路）の路面の遺構が見つかったことにより、「六条三筋町を作ったときに、楊梅通が、楊梅小路の位置から約二五メートル北寄りに挿げ替えられたこと」が確かめられています（「平安京左京六条三坊五町跡、発掘調査現地説明会資料」二〇〇五年四月三日、京都市埋蔵文化財研究所、<http://www.kyoto-arc.or.jp/142syoutoku.pdf>）。確かに地図をみると、堀川通から東中筋通の間は、現在でも楊梅通が平安京の楊梅小路の位置にあり、東中筋通のところまで北へ折れ

曲がっていることがわかりますね。

それでは、新町通以西はどうか。『好色一代男全注釈』下巻（前田金五郎、角川書店、一九八一）の一節、「後は様つけて呼ぶ」の注釈によれば、「そののち西側に発展し、西洞院通東側に太夫町（別称西洞院町）、中堂寺町、湯屋町（揚屋町の誤りか？）ができた」とされています。この注の記述は、原典が記されていない、考証を経たものかどうかからないので、さらに確認が必要です。『京都市の地名』の「六条三筋町」の項には、「元和三年（一六一七年）に京都所司代へ訴えて、市中の非公許出合屋を六条三筋町近辺に集めたこと（のちに島原に移ったときに揚屋町にまとまったらしい）」と、「元和四年（一六一八年）の訴訟によって、遊女歌舞伎などの興行者を集住させて、六条西洞院に傾城町（太夫町）が成立したこと」が載っています。

ちなみに、六条三筋町にあった町名（上之町、中之町、下之町、太夫町、中堂寺町、揚屋町）は、そのまま島原の地名として引き継がれています。

洛中風俗図屏風に描かれた六条三筋町

『洛中風俗図屏風（舟木本）』（東京国立博物館蔵重要文化財）の画像がホームページ（<http://www.tnm.jp/>）から閲覧できます。この屏風の情景は、六条三筋町が全盛のころ。当時の風俗がわかってたいへんおもしろい。右隻の左下隅に、六条三筋町の様子子が詳しく描き込まれています。東西の通りに名札が付けられており、北から「上の町」、「中の町」、「下の町」とよめます。東京

国立博物館の画像データは転載が禁じられていますので、このシリーズに載せるわけにはゆかないのが残念です。いきいきとした情景がどこまで伝えられるかわかるませんが、およばずながら、描かれた人物を説明してみましよう。

上之町の路上では、武士の袖を引く遊女。三味線を肩にうつむき加減に歩く若侍。店の奥では、男と遊女らしき女が話し込んでいる様子。この屏風が描かれた時代には、三味線は最新の楽器でした。沖繩（琉球）の三線が十六世紀に堺に渡来して、改良されて現在の三味線（銀杏形の撥を使うもの）となったのが安土桃山時代といえます。左隻の右下隅には、上之町の続きの画面があり、女が部屋から身を乗り出して、男たちと駆け引きしているところが描かれています。

中之町では、扇や笹を手に踊り狂う女たち（ざっと十人程度）とそれを見物する人々が描き分けられています。編笠を被り袖や扇で顔を隠して見物している五人連れの武士たち。天秤棒で荷を担いだ商人らしき男。格子戸の奥から覗く女たち。暖簾をそとあけて見物する女。左隻の右下隅には、中之町の続きの画面があり、抱擁する一組の男女、男を振り払う女、女二人が編笠姿の武士と交渉しているところが描かれています。

下之町では、路上で抱き合う男女。白黒の斑の犬と遊ぶ女。連れ立って歩く若い男女。床机に半跏する女。その前で抱き合っている男女。これを眺める男たち。意味ありげに文を読む三人の男。大きな荷を担いだ男と交渉する女。

表通りから入った店の中では、鏡に向かって化粧をする女。着物を着付けている女。奥座敷で太夫の弾く三味線を、煙管をくわ

えながら聴く客。行水をしている女は、上半身のみが描かれており、下半身はたくみに屏風の下端に隠しています。

このように、ずらずらと書き上げただけでも、興味をそそられるではありませんか。百聞は一見に如かずともうします。六条三筋町を含む部分図もありますので、京都国立博物館のホームページ（<http://www.tnm.jp/>）から、画像データをぜひ一度ご覧ください。

[http://www.tnm.jp/jp/servelet/Con?
pageId=E16&processId=00
&colId=A11168&kingId=C0021445](http://www.tnm.jp/jp/servelet/Con?pageId=E16&processId=00&colId=A11168&kingId=C0021445)

紙面の都合で改行していますが、スペースを入れずに続けてください。また、『洛中洛外図（舟木本）町のにぎわいが聞こえる』（奥平俊六、小学館、二〇〇二）にも図版が載っています（説明のところで「揚梅通」とルビを振った形でしていますが、これは「揚梅通」の誤りでしょう）。

吉野太夫

六条三筋町といえば二代目吉野太夫。一六三一年に豪商灰屋（佐野）紹益に身請けされた話是有名です。藤本箕山（一六二八〜一七〇四）の『色道大鏡』によると、中古六条の七人衆の第一番にあげてあるほどの才色兼備。七人衆以後にも、六条四天王がいたが、これらの太夫はおしなべて、高貴でも金持ちでも、気に入らぬものは客としてもてなさないという気概をもっていたと伝

えています。

吉野太夫については、いろいろと言ひ伝えがありますが、『色道大鏡』の記載がいちばんありそうな話です。吉野太夫を身請けした灰屋紹益は、この件を咎められて、一門から義絶されます。しかし、ほどなく、吉野の節あり義あるところを一門が伝え聞いて和睦することになり、吉野と対面するために一門が集まることになりました。一門の女性は、天下無双の吉野に会うというので、着物を新調して、化粧を念入りにいたします。宴たけなわになつても吉野はあらわれず、使いをたてても、なお宴席に出ないのので、吉野を見ようと一門の男女もろとも台所へ押しかけます。すると、そこにいたのは、「きよげなる女の、しほれたる肌着のうへに藍染の木綿の袷をかさね、黒き帯を押しごきて高きしたる」。これ、すなわち吉野。一門の女性は、吉野の手をとつて、宴席にみちびき、「どつして、そんなに遠慮するのか」といいますと、

吉野さしうつふき、涙をながしていへるは、「さてさて
 ありがたき仰、冥加なきまでにおぼえ候。妾は是、疋夫
 の家に生れ、幼少より人につかへ、殊更つたなき傾国と
 なりし身なり。なべての妾は、色につきてその一人の寵
 をうくるといへども、外のいつくしみなくして、胸をい
 たましむるに堪たり。余、公の御いたはりによつて是に
 とどまるといへども、簾中のさたに及ばず、ひとつとし
 て其心なし。しかあるに、我を今、公の妻室になぞら
 へさせ給ひ、ゆかりあるかたにおぼさんとや、なかな

かおもひもよらず。自今以後、公の家女としてつかうまつり、御家門の御まじはりにめさせ給はば、陪膳をつとめ、御酌につかへまつらんと、儉に演たりし詞の花のほひあまりて、

藤本箕山『色道大鏡』巻第十五・雑談部
 新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六

一門の女性のきらびやかな服装も、吉野の藍染の庶服に気おされてしまいます。灰屋の一門は、「すくも」から藍を建てるときに使う木灰を商つていたことを考えれば、吉野が着ていた藍染の庶服も考え抜いた装いであったといふことでしょう。吉野の真情にほだされて、一門の男女は吉野を受け入れることになりました。しかし、命はかぎりがあり、おしくも吉野は三十八歳で早死してしまいます。鷹ヶ峰の常照寺に墓があり、そこには吉野太夫が寄進した「吉野門」が残っています。

『色道大鏡』巻十七には「扶桑列女傳」が念の入ったことに漢文で記されており、その中に「吉野傳」が載っています。それによると、吉野の令名（麗名）は、中国にも伝わっており、かの地から贊美の漢詩が届いたといひます。大変おもしろいので、その一部を引用してみましよう。

吉野諱 徳子、姓藤原、松田氏、（中略）有大明國
 吳興李湘山者、夢中會吉野而通言、慕這幽容、
 而以寛永四年丁卯秋八月、賦詩而送、抹桑、其詩
 曰、

日本曾^テ聞^ク吉野ガ名

夢^{トシテ}中^テ髻^{シテ}鬢^{シテ}覚^{シテ}猶^{シテ}驚^ク

清^シ容^シ未^ダ見^レ恨^シ無^シ極^ク

空^{ムナシク}向^ク海^ヲ東^ヲ數^フ鴈^ノ行^ヲ

藤本箕山『色道大鏡』巻第十七・扶桑列女傳

新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六

さらには、画像の所望があり、七幅を九州經由で中国に送ったと書かれています。ここまでくると、すこし眉に唾をつけたくなりますね。

文芸作品の中の六条三筋町

井原西鶴(一六四二—一六九三)は、六条三筋町が島原に移った直後に生まれております。『好色一代男』(一六八二年、天和二年刊行)は、好色物と呼ばれる、彼の浮世草子の第一作。主人公の世之助の七歳から六十歳までの恋の遍歴を描いたもので、『源氏物語』のパロディーになっています。但馬生野の銀山成金の夢助が、六条三筋町の三人の太夫(葛城、薫、三夕)を身請けし、そのうちの一人にできた子供が、主人公の世之助という設定。ただし、記述に一条戻り橋がでてくることから、六条三筋町ではなく二条柳町ではないかという説があります。

『好色一代男』の巻五の「後は様付けで呼ぶ」は、六条三筋町の吉野太夫の話を下敷きにしています。まずは、吉野太夫が

ここで、引用した漢文の訓点文の中にあらわれる特殊な符号について説明しておきましょう。

一つは、音合符と呼ばれる符号で、たとえば、「夢^{トシ}中^ニ」の中央にあらわれる縦棒です。これは上下の文字を熟語として、音で読むことを示しています。つまりこの場合、「夢中に」とよみます。

一方、訓合符と呼ばれる符号は、たとえば、「覚^{サトメ}猶^{ナホ}」の中の左脇に添えた縦棒です。この場合は、「覚て猶」と訓で読むことを指示しています。

これらの特殊な符号をふくむ訓点文の組版は、通常のワードプロセッサではむずかしいのですが、朗報を一つ。多少、自己宣伝になりますので、こころぐるしいのですが。

訓点文の組版は、著者が開発したソフトウェア `sflkan-bun.sty` を `PLATEX` と組み合わせて使えば簡単に実現することが出来ます。 `sflkan-bun.sty` は、著者のホームページ <http://xyntex.com/> からダウンロードすることが出来ますので、興味ある方はご覧ください。また、『続^続PLATEX2ε階梯・縦組編』(藤田眞作者、アジソン・ウエスレイ、一九九八)と『PLATEX2ε入門・縦横文書術』(藤田眞作者、ピアソンエデュケーション、二〇〇〇)に詳しい説明がありますので、参照してください。

故あつて退郭させられた顛末が脚色されて載っていますが、ここは省くことにいたします。そのうしろの箇所は、『色道大鏡』巻第十五・雑談部から引用したものは、全く異なつた風に脚色されていますので、比較のために触れることにいたします。

遊女と一緒にたつたことを理由に、世之助が一門から義絶されることは同じですが、そのあとがちがっています。吉野は「さもあらば御一門様の御中を私なほし申すべし」とむしる積極的に働きかけます。「吉野に暇をとらせて帰したので、仲直りの宴に招待したい」という触れ込みで、一門の女性を呼ぶように世之助に頼みます。仲直りの酒席がほどよく和んだところで、吉野の登場。

吉野は浅黄の布子に赤前だれ、置手拭をして、へぎに切鬘斗の取肴を持ちて、中でもお年を寄られた方へ手をつかえて、「私は三すぢ町にすみし吉野と申す遊女、かかのお座敷に出るはもつたいなく候へども、今日御隙を下され里へ帰る御名残に」、昔を今に一ふしをうたへば、きえ入るばかり。琴弾き歌をよみ、茶はしをらしくたてなし、花を生替へ、土圭を仕懸けなほし、娘子達の髪をなで付け、暮のお相手になり、笙を吹き、無常咄、内緒事、よろづ人さまの気をとる事ぞかし。

井原西鶴『好色一代男』

『井原西鶴集一』暉峻康隆、東明雅校注・訳
新編日本古典文学全集六六、小学館、一九九六
吉野ひとりのもてなしに、いたく感じ入り、一門の女性はくちくち「吉野を離縁する必要はない」と。このような筋立てとなつ

ています。

近松門左衛門（一六五二—一七二四）の『けいせい反魂香』（一七〇八年、宝永五年初演）にも、六条三筋町がでてきます。中之巻が「六条三筋町大門口の場」。

里は都の坤なり、通へても、通ひ足らぬぞ三筋町。西の洞院、中堂寺、右衛門が馬場の一方口、また大門口の遅桜。

近松門左衛門『けいせい反魂香』

『近松門左衛門集三』鳥越文蔵他校注・訳
新編日本古典文学全集七六、小学館、二〇〇〇
と幕が開き、大門口に死骸があることから騒動がはじまります。続いて「六条三筋町舞鶴屋の場」。筋は入りこんでいて、わたしごときに、とても要約はできませんが、「画家狩野元信、銀杏の前、傾城遠山（のちの遣手みや）の三角關係を軸に物語が展開します。祝言をあげたみや（遠山）が実はすでに死んでいることを知らされる元信。よくよく見ると、みやが逆立ちで歩いているのに気づき、亡霊であると悟るといふあらずじ。反魂香の名は、漢の武帝がその香を焚くと、亡き季夫人が現れたという故事によるもの。

場所の設定は六条三筋町ということになっていますが、「里は都の坤」は、都の西南で島原のあるところ。したがって、『けいせい反魂香』は、実際には、島原をモデルにしていると思われる。そこになぜ「西の洞院」がでてくるのか。これは、六条三筋町の地名を、移転の際に島原に移したものの、『色道大鏡』には、島

原の地図が載っていて、「太夫町 西洞院ともいふ」とわざわざ書
いてあります。

柳亭種彦（一七八二～一八四二）の『偽紫田舎源氏』（一八二九
年から刊行。一八四二年発禁。種彦の死によって中断）もまた、
源氏物語のパロディですが、六条御息所に擬して、六条三筋
町二見屋の遊女「阿古木」を登場させています。六条三筋町が消
えてから、二〇〇年もあとに、この傾城街の名が出てくるのはい
かに有名だったかがわかります。六条御息所と語呂を合わせる事
情は割り引くにしても。

此頃六条三筋町に、その名を阿古木と呼びて、いと時
めきし遊女あり、年は二十を三ツ四ツ越え、盛りは少
過ぎたれども、今も昔の色香失せず、訪ひよる客は数多
なり。

『偽紫田舎源氏』（上）岩波新古典文学大系八八。鈴木重三
校注（一九九五）

通いつめる山名統清を袖にして、こ器量のよい若殿様足利光氏
（光源氏のもじり）に心をときめかす段取り。さらには、阿古木
という名も、能の『阿漕』からとっているという念の入った筋立
て。古典というのは、本当に奥が深いですね。

楊梅室町西南類之倉

楊梅室町から西南の一区画、江戸時代には六条三筋町のあった
ところには、下京中学校と下京消防尚徳分団が新築されていま

す。元の尚徳中学校から下京中学校に建て替えるときに、京都
市埋蔵文化財研究所によって発掘調査がおこなわれました。この
発掘によって、倉庫跡とみられる甕を備え付けた穴が多数みつか
り、穴底のいくつからは、常滑焼の甕の底が出土しています。
出土した甕は、室町時代前期（十四世紀前半）のものとみられる
と報告されています（上記現地説明会資料および「リーフレット
京都」No. 210（二〇〇六年六月））。発掘二ユース七五「楊梅室町
西南類之倉」。報告書によると、「一四一九年（応永二六年）に
室町幕府が酒麴の密造禁止令を出したときに、町内の酒屋が出し
た誓約書が『北野文書』として北野神社に残っており、その中
に、応永二六年十月二日付で、「公方より仰被_レ出候かうしの事、
向後、仕候ましく候。楊梅室町西南類之倉」との文面があり
（『史料京都の歴史十二下京区』京都市、一九八一）、これが今回
の発掘地点にびったりと合致している」とのこと。「かうし」は
「麴」のことです。この文書の前半には、「やまも、まち」と平が
なで出てきますので、一四一九年の時点では、楊梅町をこのよう
に読んでいたことがはっきりします。

なぜ、このような文書が北野天満宮に残ったかという点、室町
時代には、酒造りは神社の特権で、麴の生産には厳しい規制が
あったためです。しかし、麴の密造は横行したよつで、神社は、
たびたび室町幕府に訴えて禁止を迫りました。上述の密造禁止令
（一四一九年）はその一つのあらわれです。京都市埋蔵文化財研
究所の報告書では控えめに記していますが、文献の記載と考古学
的な発掘との照合がえられたのはすばらしい成果です。

酒蔵が棄却されたあと、応仁の乱（一四六七～一四七七）の

時期の地層は整地層で経済活動の痕跡はないとのことでした。したがって、六条三筋町が作られるまでは、荒廃していたと考えられます。

下京中学校

町名看板①②のある楊梅室町から西南の一区画は、室町時代には酒蔵、江戸時代には六条三筋町。それ以降は、本願寺の門前の商業区域の一画、雪駄屋町（近辺に、雪駄を商う店が多かったといえます）。そして、明治時代に入って、下京第十六番小学校が、明治二年に設置。明治五年下京第二四組小学校、明治八年新楊小学校、明治十年尚徳小学校、明治四一年尚徳尋常小学校、昭和十六年尚徳国民小学校に名称変更されたあと、太平洋戦争敗戦後に、尚徳中学校となり、今年（二〇〇七年）、下京中学校と変わりました。

この下京中学校（楊梅通新町東入ル蛭子町）は、下京区にあった五つの中学校（郁文中学校、成徳中学校、尚徳中学校、皆山中学校、梅逕中学校）を少子化のため統合して今年（二〇〇七年）から発足したものです。新築された校舎は、京町家をイメージしており、学校とはおもえないくらい瀟洒な造りで感心いたしました。元の尚徳中学校の隣にあった楊梅幼稚園は、現在、醒泉小学校（第2回参照）の敷地内に移転しています。

下京中学校の裏手の通りは、鍵屋町通。この通りに面して、壁際にお地藏さんの祠が組み込んであるのは京都らしい。ここにも「明治天皇行幸所下京第廿四番組小学校」の碑があります。明



明治天皇行幸所下京第廿四番組小学校の碑と尚徳中学校の碑（下京中学校裏）

治五年に京都第廿四組小学校であったときに行幸された記念碑です。尚徳中学校の記念碑も並んでいます。

京都人でないわたしがいうのも口はばつたいけれども、明治維新時に京都衰退の危機を救ったのは、教育基盤の整備。作った教育基盤を百年の単位で維持したことも重要。ここでまた、平成の危機を救うのは、教育基盤の再編成、そして、その継続維持。

下京中学校と同じ町内に、「鍵屋町通室町西入蛭子町」③の看

板があります。これは、写真の写りがわるいのではなく、退色がひどく、町名もやっとのことで読み取りました。軒下でなく、よく陽のあたるところなので、仕方のないこととはいえ、残念です。

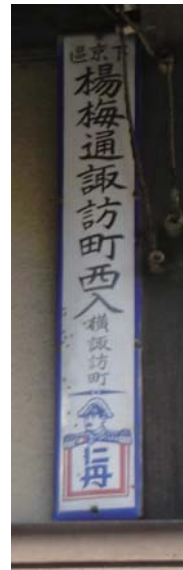


鍵屋町通 室町西入 蛭子町 ③

和菓子、そして町名看板

室町通の一筋東の南北の通りは、諏訪町通。「諏訪町」の読みは、多分、「すわのちよう」と読んでいたのが、音便で「すわんちよう」になったのでしよう。『都名所図会』巻二には、諏訪町なる地名がでており、この時代には、「すわのまちどおり」と読んでいた可能性もあります。諏訪町通のこのあたりは、仁丹の町名看板が多いところです。そして、和菓子屋ももちろんあります。まず、和菓子。鍵長（鍵屋町通室町東入ル南側鍵屋町）では、名物は、長楽。上段はしぐれ風、下段は小倉羹をあわせた棹物。そのほかには、季節にあわせた上生菓子。

もう一軒は、おはぎ専門の今西軒（楊梅通諏訪町西入ル南側横諏訪町）。明治三十年創業。一時閉店していたが、五年前に復活



楊梅通 諏訪町西入 横諏訪町 ④



諏訪町通 楊梅上ル 横諏訪町 ⑤

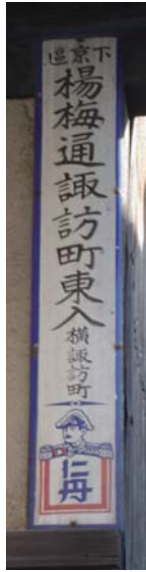


二枚の看板④⑤の出現状況

おはぎは、粒餡つぶあん、漉し餡こあん、黄な粉の三種。甘さ控えめの餡は量がたっぷり。わたしが着いた午後三時には、すでに売り切れでした。後日、午前十時半に訪ねたときには、さすがに全種類のおはぎを手にいれることができました。

今西軒は、町名看板①②の楊梅室町の十字路から、楊梅通を東へ行ったところで、楊梅諏訪町の十字路の西南かどにあります。その向かい北側のお宅（西北かど）の二階に、二枚直角に並んで町名看板が見つかります。「楊梅通諏訪町西入横諏訪町」④と「諏訪町通楊梅上ル横諏訪町」⑤。出現状況が特殊ですので、両方の位置関係を示す写真も載せておきます。

この十字路の東南のかどに、もう一枚、町名看板「楊梅通諏訪町東入横諏訪町」⑥があります。町名看板④と⑥は、「西入」と「東入」の違いだけです。三枚の町名看板④⑤⑥を比べると、第



楊梅通 諏訪町東入 横諏訪町 ⑥

1回で述べた町名の付け方の原則がきちんと守られていることがわかります。すべて、おなじ町名「横諏訪町」ですから、楊梅諏訪町の十字路を基準にした両側町を示していることになりました。楊梅諏訪町の十字路を南にすこし歩くと、電柱に「諏訪町通鍵屋町上ル鍵屋町」⑦の町名看板が貼ってあります。ここでは、

通りの名前の鍵屋町通と町名の鍵屋町とを、違つ読み方にしてありますが、これで正しいのかは自信がありません。



諏訪町通 鍵屋町上ル 鍵屋町 ⑦



楊梅通 烏丸東入 大坂町 ⑧

楊梅諏訪町の十字路を東へ、烏丸通を渡つたところに、「楊梅通烏丸東入大坂町」⑧の町名看板があります。

諏訪神社

諏訪町通すわんちょう通りの由来となった諏訪神社は、諏訪町通の場かみ上ル下諏訪町にありますす。坂上田村麻呂が信州諏訪大明神を勧請した神社と伝えられています。祭神は、建御名方神たけみかたのかみ。現在の社殿は孝明天皇が再建したといわれています。

この日はちゃんとご神灯が提げてありました。

御火焚祭の二日前にもここを通りかかって、諏訪神社の周りで何枚か写真を撮ったのですが、その中の一枚。諏訪神社の門標を撮ったつもりだったのですが、仁丹の町名看板「諏訪町通鍵屋町下ル鍵屋町」^⑨の看板が偶然に写り込んでいました。仁丹の町名看板にはまったく気づいてなかったとは、見れども見えずとはこのこと。その手前に、別のスポンサーの看板「諏訪町通鍵屋町下ル下諏訪町」があることにも実は気づいていませんでした。二〇〇七年十二月二十日掲載の版では、判別できる程度の写真でもないよりましと載せていました。しかし、あまりにも迂闊なので、次の年（二〇〇八年）に上洛した際に再訪して、撮りなおしました。今回の版では、撮りなおした写真に差し替えることにします。鍵屋町と下諏訪町の境目がこの二つの看板の間です。

六条魚棚

六条通は、堀川通から始まって、新町通に突き当たったところが、銭湯（白山湯）。ここまでは、すでに第2回、第3回で、出現する町名看板を紹介しました。新町通で、南にずれて、さらに東へ続きます。細い道ですが、沿道の油小路／室町間は商店街になっています。

六条室町の十字路の西北かどに、町名看板「六条通室町西入西魚屋町」^⑩が見つかります。この看板の両側町「西魚屋町」の表示は、魚棚通が六条通の別名であることの証拠になります。な

にせ、「六条」と「魚屋」が、一つの町名看板に同居していますから。



六条通 室町西入 西魚屋町^⑩

室町通を挟んで、看板^⑩の向かい側、六条室町の十字路の東北かどに、「六条通室町東入東魚屋町」^⑪と「室町通六条上ル堺町」^⑫が九〇度で隣り合って貼ってあります。出現状態を示すために、角度を変えて二枚が判読できるようにしたのも載せました。

この二枚^⑪と^⑫は、同じお宅に貼ってあるのに、町名が異なります。このお宅は、東魚屋町に属するのでしょうか。それとも堺町に属するのでしょうか。これは、一見もつともらしい質問ですが、あきらかに愚問。玄関があるほうだという基準はほとんど自明なので、東魚屋町に属すると考えるのが妥当です。地図を見ると、南北に隣接する堺町と東魚屋町の境界は、室町通六条をすこし北に行ったところにありますから、看板^⑫の貼り方は、杓子定規にいうと正しくはありません。ただし、かどのお宅の側壁に貼ってありますから、そんなに目くじらをたてることもありません。

このシリーズでは、話の都合で別々の回に分散してしまいました

二枚の看板⑪⑫の出現状況



むろまちどおり 六条 上ル 堺町 ⑫



ろくじょうどおり 室町東入 東魚屋町 ⑪



この町名看板のすぐ東は、南北の幹線道路、烏丸通。交通量の多いのは、相変わらずです。六条通は、烏丸通ですこしだけ南側にずれて、やや広い通りになっています。続きは、またの機会に。

ろくじょうどおり からすまにしいる 六条通 烏丸西入 北町 ⑬



たが、六条通を堀川から東へ、通して歩きますと、仁丹町名看板として、第2回の「六条通醒ヶ井東ル佐女牛井町」と「油小路通六条下ル西若松町」、第3回の「西洞院通六条下ル西側町」、「六条通若宮東入ル上若宮町」、「若宮通六条下ル若宮町」、さらに今回(第6回)の「六条通室町西入西魚屋町」⑩、「六条通室町東入東魚屋町」⑪、「室町通六条上ル堺町」⑫を見つけたことになります。商店街からははずれませんが、もつ一枚六条通に町名看板「六条通烏丸西入北町」⑬を見つめました。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第6回）2007/12/20

改 2008/07/13

© 2007, 2008 藤田眞作 <http://xyntex.com>

